

京都大学教育研究振興財団助成事業  
成果報告書

平成28年9月26日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 京都大学霊長類研究所

職名・学年 研究員

氏 名 徳 山 奈 帆 子

助成の種類	平成28年度 ・ 若手研究者在外研究支援 ・ 国際研究集会発表助成		
研究集会名	国際霊長類学会 International Prinatological Society		
発表題目	Partially shared collective decision-making in wild bonobos at Wamba, DR Congo		
開催場所	アメリカ合衆国イリノイ州シカゴ、ネイビーピア		
渡航期間	平成28年8月19日 ～ 平成28年8月30日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有( )		
会計報告	交付を受けた助成金額	300,000円	
	使用した助成金額	300,000円	
	返納すべき助成金額	0円	
	助成金の使途内訳	航空券	149,900円
		学会参加費	30,000円
		ビザ代	2,500円
		現地交通費	7,800円
国内交通費		3,400円	
	宿泊費、日当	106,400円	
当財団の助成について	物価や宿泊費が非常に高い場所での開催であったため、貴財団の助成がなければ参加を躊躇していたことと思います。助成をいただいたおかげで、世界中から霊長類研究者が集まる場で発表をすることができましたことを心より感謝いたします。		

## 成果の概要／徳山奈帆子

平成 28 年度若手研究者在外研究支援/国際研究集会発表の助成を受け、2016 年 8 月 21 日から 27 日に開催された国際霊長類学会(International Primatological society)に参加した。国際霊長類学会は、2 年に 1 回開催され、行動、生態、遺伝子、形態、心理、脳科学など分野を問わず霊長類を研究対象とする研究者が世界中から集まる場である。今回はアメリカ霊長類学会との共催で、アメリカ合衆国シカゴでの開催だった。

### <得られた成果>

私はチンパンジーと近縁の類人猿であるボノボ(*Pan paniscus*)の社会行動についての研究を行っている。今回の学会では”Partially shared collective decision-making in wild bonobos at Wamba, DR Congo”という題目で 8 月 23 日に口頭発表を行った。集団の凝集性を保つためには、個々の個体がそれぞれの採食や繁殖戦略を持つ中で、いつ、どこへ移動するのか意思決定しなければならない。そのような移動の開始のタイミングや方向を、集団内のどのような個体が決定しているのか検討した。ボノボの集団移動開始の決定は、特定の個体に偏った形で“リーダーシップ”が見られ、老齢のメスの意思決定に他個体が同調することで集団の凝集性が保たれていること示唆された。老齢個体は若齢個体よりも行動圏内の果実分布についてより豊富な知識をもっており、集団をより良い採食場所に導くことができること、またボノボでは老齢メスが集団内で一番高い社会的地位を持つことが理由であると考えられる。私の発表はオランウータンの研究の第一人者である van Schaik 博士、クモザルの社会生態学的研究で有名な Aureli 博士など非常に著名な研究者と同じセッションに割り当てられ、1000 人規模の大ホールで行われた。そのため、予想していたよりもはるかに多くの方々に発表を聞いていただけた。発表が終わったあと、数人の研究者に声をかけていただき、好意的なコメントをいただくことができた。

今回は、私の専門分野である霊長類の社会関係や行動生態学に関する研究発表が特に多かったように思う。聞きたい発表が同じ時間に重なり、どちらを聞きに行くか迷うこともしばしばだった。特に感銘を受けたのは、数十年間に渡って研究が続いているチンパンジーの調査サイト同士が協力してデータを提供し、複数サイトの長期データを分析したシンポジウムだ。合わせて 100 人以上もの研究者が取った数十万時間に及ぶ観察データから得られた結果は圧巻だった。霊長類研究者とイルカ研究者が交互に発表を行って、霊長類と鯨類の音声コミュニケーションや集団内の個体間関係、集団間関係などの類似や違いを議論していたシンポジウムも面白かった。発表の合間には多くの研究者とお話する機会があった。早くも、2 年後にケニアで行われる次の国際霊長類学会でのシンポジウム企画についての議論も行った。

8 月 22 日には、Duke 大学の Brian Hare 博士が主催する、ボノボに関わりのある研究を行っている方々が集まる”Bonobo curious party”に参加した。私の調査地とは違う場所で野生のボノボを研究している方々と交流を持つことができ、情報交換や議論を行った。共同研究の可能性についても双方からアイデアを出して話し合い、非常に楽しく、有意義な時間を過ごすことができた。

学会全体について強く感じたのは、女性の研究者が非常に多いということだ。日本霊長類学

会では学生や若手には女性も多いが、シニアになると男性がほとんどである。しかし、国際霊長類学会の参加者は若手からシニアまで、過半数が女性であるように見えた。Lifelong contribution award を受賞されたのはチンパンジー研究のパイオニアである女性研究者の Jane Goodall 博士で、学会若手研究賞を受賞されたのも女性の Katie Hinde 博士だった。子供連れで来ている参加者も多かった。今後のキャリアを考えるうえでも、今回の学会への参加は私にとって大きな励みとなる経験であった。

<謝辞>

最後に、このたびの機会を与えてくださった京都大学教育研究振興財団に深く感謝申し上げます。



口頭発表の様子